

幼児の共同遊びに関するレビュー： 形態と展開に注目して

教育創発学コース 箕輪 潤子

Review of Children's Cooperative Play

Junko MINOWA

This research is a review of the early research on children's(3-6 years old)joint play. The researchers who did study about children's joint play paid attention in the number of people of children and the form of the group, or paid attention to the content of the communication of the child. However, it is difficult in these researches to catch the flow of child's play. It can be said that it is necessary to pay attention what to have occurred in the process of play in being research in the future.

1. 問題と目的

子どもたちは、幼稚園や保育園のような集団生活の中で、様々な活動を行い、その中で仲間とやりとりを行っている。特に、遊び場面においては、他の生活場面に比べ、仲間とのやりとりを他者(特に大人)に介入されることなく、行うことができる(松島, 1996)。子どもたちは、遊びの中で他の子どもと多様な経験を共有することで、仲間との関わり方を学んだり、より充実した遊びを生み出してまたそれを共有していくたりすることに繋がってゆくと考えられる。子どもと子どもが共に遊ぶことは、子どもの経験に広がりと深さをもたらしていく上で、重要なことではないだろうか。特に、心の理論の獲得などによって、仲間関係がめざましく発達するのは、幼児期だと言われている。幼児期の子どもたち同士の遊びを研究の対象とすることは、遊びにおいて幼児同士が共有している経験を捉え、保育者がより幼児が豊かな遊びを作り出すための援助をする上で、重要なことであると考えられる。そこで、本研究では、幼児同士の遊びについて先行研究の整理を行い、今後、幼児同士の遊びを捉える上でどのような視点が必要なのかを探ることを目的とする。

まず、先行研究において「幼児同士の遊び」は、どのような言葉で、どのように定義されているかについて整理し、本研究において整理する対象とする先行研究の範囲を明確にしたい。

学校教育や幼稚園教育における「遊び」に関しては、「協同」という言葉がよく用いられているのに対し、遊びに関しては「協同」と「共同」の両方の表現が用いられている(先行研究においては「協同的遊び(星, 1991; 仮屋園, 1999; 結城, 2004)」「共同遊び(藤崎, 無藤, 1985; 浜谷, 常田, 藤崎, 鈴木 1993 他; 木原, 1993; 無藤, 1996仮屋園, 1997; 佐藤, 2001他; 富田, 2001など)」)。但し、「共同遊び」「協同遊び」に関する研究において、「共同」や「協同」という言葉に明確な定義を与えているものは殆どみられない。但し、「共同遊び」「協同遊び」研究は、「複数の子どもが一緒に遊ぶ」遊びを分析の対象としている点で共通している。更に「協同遊び」研究は「複数の子どもが協力して遊ぶ」遊びを分析の対象としている。「協同遊び」も「共同遊び」の中に含まれるものとして、捉えることができるだろう。なお、共同遊びは、研究において「集団遊び(森下, 1998; 粕谷, 1999; 福田, 2001)」や「仲間遊び」と表現される場合もある。本稿では、「共同遊び」の中に、「協同遊び」「集団遊び」「仲間遊び」も含め、「2人以上の幼児が一緒に遊ぶ遊び」を「共同遊び」とする。本稿で整理する先行研究も、本研究の「共同遊び」の定義に含むものを対象としたい。

以下、本稿における先行研究の整理の視点を述べる。

「共同遊び」に含まれる遊びの範囲はかなり広い。参加する人数、参加する子どもの年齢、集団形態、活動内容、用いる素材、持続時間等は多様である。実際、共同遊びに関する先行研究が扱っている遊びは、内容

や人数など多様である。そして、それに伴い、更にそれぞれの研究の目的によって、多様な観察の視点や分析の方法がとられている。そこで、本稿では、「共同遊び」の先行研究を、(1)内容形態(遊びの内容や、人数など、遊び全体を総合的にとらえる)に焦点をあてた研究と、(2)遊びの過程(遊びの流れの中で、子どもが如何に相互作用を行っているか)に焦点を当てた研究とに分けて、それぞれの視点で遊びを見ることの意味と課題について、整理をしてゆく。そして、整理を行った上で、これまでの共同遊び研究で何が明らかになり、何が明らかになっていないのか、今後「共同遊び」をどのような視点で研究する必要があるのかについて考察する。なお、本稿において用いる「子ども」は、特に記述がない場合を除き、幼児(3~6歳)とする。

2. 共同遊びの形態：共同遊びを分類する

最初に、「共同遊び」とされている遊びが、どのような遊びの内容形態を持つのかについて、先行研究を整理する。その上で、共同遊びを内容形態によって捉えることが、どのような意味を持つのかを考えてみたい。整理の観点は、(1)グループサイズ(子どもの人数)と集団形態(2)活動内容の2点である。

(1)グループサイズと集団形態

Smith(1977)は、遊びグループの参加人数を調査し、2才半~3才半では60%弱が2人での遊びを占めており、3才半~4才半でも2人組の遊びが50%を占めていると述べている。幼児期の後半になると、2人の遊びが35%まで減少し、年齢の上昇に伴い3人、4人、5人とグループも大きくなる。なお、遊びグループの人数に関しては、場所や場面との関連からの検討も行われている。Smith & Connolly(1980)は、遊び場の面積とグループサイズに関連がないということを明らかにしている。そして、廣瀬ら(2006)は、遊び場面(屋内・屋外)が幼児の遊び相手に与える影響について分析を行い、場面によって幼児の遊び相手が異なること、場面が遊び相手に与える影響が年齢によって異なることを明らかにした。例えば、3、4歳児では、屋内で遊ぶことが多い子どもでも、屋外では2人以上のグループで遊ぶことが多いのに対し、5才以上では場面にかかわらず2人以上のグループで遊ぶことが多いことなどである。

グループサイズが大きくなるということは、多種多様な意見を調節する必要性が高くなることを意味する。グループサイズに関する研究からは、幼児が発達に伴

い他児と関わる上で必要な社会的能力を獲得していくことがわかる。しかし、グループの人数が多いほど発達していると捉えるグループサイズ研究では、グループにおける幼児同士の関わり方までは捉えることができない。

何人で遊ぶかということではなく、集団形態に着目したのが、Parten(1932)を始めとした研究者たちである。Partenは、幼児の社会的遊びを観察し、「何にもしていない行動(unoccupied behavior)」「一人遊び(solitary play)：近くで遊んでいる子どもが使っているのは異なるおもちゃを用い、1人で遊んでいる」「傍観(onlooker)：他児の遊びを見ている。声をかけたりはするが遊びには入らない」「平行遊び(parallel play)：子どもは独立して遊んでいるが、他児の用いるおもちゃに似た(もしくは同じ)おもちゃで遊ぶ。但し、おもちゃを用いて行う活動は他児に影響されない。」「連合遊び(associative play)：他児と遊ぶが、基本的に子どもは自分のやりたいようにしており、自分の興味をグループに従属させることはしない。」協同遊び(cooperative or Organized supplementary play)：何らかの目的のもとに組織化されたグループで遊ぶ。仕事や役割の分担がある。」に分類した。彼は「協同遊び」を最も発達した段階と位置づけ、年齢が上がるにつれて社会的な遊びの形態も発達していくと述べ、その考えは多くの人に受け入れられてきた。なお、藤崎、無藤(1986)は、Partenの分類でいう「平行遊び」「連合遊び」「協同遊び」を、「共同遊び」としている。

しかし、Smith(1978)によって、一人遊びが未熟な形態というわけではなく、子どもが集団で遊ぶか一人で遊ぶかを選択しているだけであるという批判がなされている。また、Bakeman, & Brownlee(1980)やRobinson et. al (2003)も、集団遊びに至る過程やある遊びから別の遊びに至る過程では、年長児でも平行遊びが認められると主張している。更に、藤崎、無藤(1985)は、年齢が低くても協同的になると述べている。なお、高橋ら(1976)は、自我と他我の心理的距離という観点から、「孤立：独り行動、独り遊び」「注目：距離を隔てて他者の行動を見る」「接近：他者に近付く、他者の側で独り遊びをする」「接触：他者の側で同じ行動をする。他者に者を渡す、奪う、話しかける」「結合：他者と相互的な関わりをもつ」という遊びにおける対人行動を6つに分類している。

共同遊びを集団形態で捉えようとした研究を総合的にみると、発達に伴って、一緒に遊ぶ人数が増加するだけでなく、遊びにおける他児との関わり方のバリエー

ションが広がって行くことが理解できる。しかし、集団形態で共同遊びを捉えることは、遊びにおいて幼児一人ひとりが他児と関わる中でどのような経験をしているのかということよりも、各集団が何をしているのかということに目を向けやすくなってしまうと考えられる。

遊びをグループサイズや集団形態で捉えようすることに対し、中野(1990)は「子どもの遊びを一人とか集団とかの形態ばかりで評価し、一人遊びを問題視することは、遊び本来の意味を大人の統制によって失わせてしまいかねない危険性があるといえよう」と述べている。グループサイズや集団形態に関する研究では、遊びグループにおいて一人ひとりがどのような役割を取っているのか、子どもたちがどのようにお互いの意見を調整し合ったり、イメージを共有したりするのかなどについて、明らかにすることが難しい。更に、グループサイズや集団形態に注目するにしても、遊びの流れの中でグループサイズや集団形態自体が変化することも考えられる。更に、無藤(1997)が指摘しているように「協同遊びといえども部分的には一人遊びに見えるところがあり、全体の中での分業といった協同性を考慮して初めてわかる」こともある。つまり、グループサイズや、どのような集団の形態をとっているのかということは、遊びにおける活動内容や、遊びの展開の中に位置づいて始めて意味があるものとなると考えられる。

(2) 活動内容

活動内容、用いる素材等に特徴を持つ特定の遊びに焦点を当て、その遊びにおける共同の成立過程や共同の構造などに関する研究が行われている。これまでに、「ごっこ遊び」(Garvey, 1977; 高橋, 1989)を始めとして、「積み木遊び」(藤崎, 無藤, 1985; 無藤, 1997)や「砂遊び」(無藤, 1996; 箕輪, 2003, 2006)などを対象として研究がおこなわれている。遊びにおける共同の成立過程については、次の節で詳しく述べることとし、ここでは特定の遊びにおいて見られる共同の構造の特徴について述べる。

まず、ごっこ遊びについてガーヴェイ(1977)は、ごっこ遊びにおいて子どもたちが主に「プラン」「役割」「物」「状況設定」について話し合うと述べている。つまり、ごっこ遊びが成立するためには(=ごっこ遊びにおける共同が成立するためには)、遊びに参加する子どもたちが「プラン」「役割」「物」「状況設定」のイメージを共有する必要があるという。次に、砂遊びに関しては箕

輪(2006)が、ガーヴェイのごっこ遊びの枠組みを用いて分析を行っている。そして、幼児同士の砂遊びには必ずしも「プラン」「役割」「物」「状況設定」に該当するものがあるとは限らないことや、構成を行う場合には構成する行為に基づいた「プラン」や「役割」が見られること、「プラン」「役割」に関するやりとりが言葉だけでなく身体の動きを介して暗黙に行われることなどを明らかにしている。なお、積み木遊びに関しては、牛山ら(1974)が、積み木は幼児が各自の力を能力に応じたやり方で自分の力を発揮でき、一方の積み木遊びが他方のそれを誘発して共通の場をつくり相互作用成立を促進するのに有効な道具であると述べているものの、積み木遊びにおける共同の構造の特徴は明らかにされていない。

上に挙げた「ごっこ遊び」「積み木遊び」「砂遊び」を初めとして、活動内容や用いる素材によって遊びを捉えることは、研究者、保育者に関わらず多いと考えられる。無藤(1997)が「物を使って遊ぶとは、その物に触り、その物の特性にふさわしい動きをするということである」と述べていることからも、用いる素材や活動内容によって、幼児同士の相互作用、子ども同士の意図やイメージを共有するための媒介、遊びの展開などが異なるのは間違いないだろう。

しかし、実際は「ごっこ遊び」と、積み木遊びや砂遊びなどの「構成遊び」の境目が曖昧であることを忘れてはならないだろう。例えば、藤崎・無藤(1986)や無藤(1997)が事例として挙げている、積み木遊びをする子ども同士の会話には、ごっこ遊びの要素も含まれている。「もうちょっと、もうちょっと、もうちょっと、四角いの。このへんにも。今は動物はお留守です。」(無藤, 1997)という発言には、構成作業に関するだけでなく、ごっこ遊びの状況設定や物の見立てに関することも含まれているのである。砂遊びに関しては、砂遊びに用いたごっこ遊びや、構成遊びとごっこ遊びが混在した遊びが展開されることを、箕輪(2006)が指摘している。そして、ごっこ遊びの研究にも、砂で遊ぶ子どもの事例が挙げられているものもある(高橋, 1989)。そして、砂遊びに関しては、構成遊びとごっこ遊びではなく、Piaget(1962)の言う「感覚運動的遊び」的な遊びも行われる(松本, 1993)。つまり、ある遊びを素材や活動内容から「○○遊び」と呼んだとしても、完全な「○○遊び」として括ることは不可能なのである。

共同遊びにおける活動内容や用いられている素材の特徴を捉えることは、活動内容や用いる素材によって変わる幼児の行為や相互作用、それに伴う幼児の経験

を理解しようと試みる上で重要なと考えられる。しかし、研究者や保育者が「○○遊び」という枠組みだけで遊びを捉えようすることは、幼児の遊びの事実とは大きくことなる捉え方をする危険性がある。実際のところ、幼児は「○○遊び」という研究者や保育者が作り出す枠組みを超えて遊びを展開していることが殆どであると考えられる。重要なのは、幼児同士で行っている共同遊びの内容を「○○遊び」として捉えることではなく、共同遊びにおいて幼児がどのような素材をどのように用い、その中で如何に相互交渉し、遊びを展開させてゆくのか、ということではないだろうか。

3. 共同遊びの展開：時間の経過と遊びの変化

内容形態で共同遊びを捉えることの限界は、時間の経過が捨象されてしまうことである。共同遊びの始まりから終わりまでの間には、個々の幼児の中に遊びに関する様々なイメージが個々に生まれ続けている。ここでは、時間の経過に沿って共同遊びを捉えている先行研究を整理する。

A 仲間入り過程

まず、共同遊びが成立するためには、まず「遊びの仲間となる」ことが必要である。遊びの仲間となり、仲間との相互作用を開始するためのきっかけとして、「仲間入り」は重要であると考えられ、多くの研究が行われて来た。仲間入りを分析した研究として、仲間入り過程や仲間入り方略の種類(e. g., Corsaro, 1979; Forbes, Katz, Paul, & Lubin, 1982; 倉持, 1994, 松井, 2001a, 2001b; 池上, 近藤, 2002)や、仲間入りの成功率(Corsaro, 1985; Garvey, 1984), 社会的地位の観点からの検討(Putallaz, & Gottman, 1981a, 1981b)等が行われている。なお、幼児が仲間と一緒に遊び始めるのは「仲間入り」を通してだけではない(松井, 2001a, 2001b)。松井は、自分の活動や新たな活動に仲間を誘うこともあれば、活動の内容よりも一緒に遊ぶことを目的として仲間を誘うこともあると述べている。

但し、遊び集団への参加が成功すれば、そのまま遊び集団の一員として遊びを展開できるとは限らない(倉持, 1994)。その点で「仲間入り」は、あくまでも子どもが遊び集団の一員となるための通過点であり、遊びにおける共同性の成立の可能性を伏在しているに過ぎないと言える。そこで倉持(1994)は、仲間入り過程だけでなく、仲間入り後の子ども同士の立場について

も検討しており、いつまでも「仲間にいる側」と「仲間に入れてもらった側」という関係が持続するわけではないと述べている。また、仲間入り後に相手との相互作用が持続したかという点について松井(2001a, 2001b)は、一時的な相互作用に終わる場合と、長時間にわたる相互作用が成立する場合があると述べている。

以上のことから、共同で遊ぶためには「仲間になる」ことが前提であるが、「仲間になる」ところだけを捉えても、共同遊びの成立過程を捉えたとは言えないだろう。そこで、共同遊びの展開過程を見ることが重要になると考えられる。

B 遊びの展開

先にも述べたように、「仲間入り」は、あくまでも共同遊びをする入り口に絞ったにすぎない。遊び始めると、子ども同士は様々な物事についてやりとりし、遊びの内容や場の状況などを変化させてゆく。そして、それに伴って、遊びに参加する子どもの人数、集団形態、活動内容(役割、プラン、見立て等)なども変化してゆく。その変化はいつどのように起き、変化はどのように子どもたちに受け入れられて(もしくは拒否されて)いくのか。共同遊びの成立や展開過程を検討している研究について整理を行ってゆくことにする。

幼児同士は遊びにおいて、「イメージ」(中沢, 1979; 砂上, 2000), 「テーマ」(藤崎・無藤, 1986), 「シナリオ・スクリプト」(ガーヴェイ, 1977), 「プラン」(ガーヴェイ, 1977), 「役・役割」(エリコニン, 1978; Bonica, 1993; verba, 1993; 秋田・増田, 2002; 増田・秋田, 2002)「物・見立て」(ガーヴェイ, 1977; エリコニン, 1978; 石渡, 2001)「状況設定」(ガーヴェイ, 1977)などについてやりとりすると言われている。幼児同士が何についてやりとりしているのかについては、研究の視点や目的によって異なっていると言えるだろう。そこで、先行研究が幼児の共同遊びにおいて、幼児同士がやりとりする過程をどのように分析しているのかに焦点を当てて整理していくこととする。

まず、子どものやりとりを分析する上で、多くの研究が焦点を当てているのは、子ども同士の「会話」である(Fein, 1981; Garvey, 1982; Griffin, 1984)。

まず、高橋(1989)は、遊びの中の言葉を「呼びかけ」「提案」「転換」「承認」「否認」「要求」「命令」「禁止」「質問」「繰り返し」という10のカテゴリーに分けて分析を行い、年齢が上がるにつれて相手の提案を生かして遊びを展

開させることを明らかにしている。次に、礪波ら(2002)は、年長児58名が同性2人組でロケットの中に入り、乗り続けるか退出するかの意思決定を行う過程における、子ども同士の会話を分析した。そして、子ども同士の意見が一致しても、必ずしもそれが共同意思(としての次の行為)に結びつくとは限らないことや、退出をめぐるやりとりにおいて、約60%以上の子どもたちが1回以上意見を変えていたことを明らかにした。そして、幼児の意思は変わりやすく、他者とのやりとりの「場」の中で揺らぎながら意思が生成されると主張している。礪波らの研究では、子どもたちが「ロケットから出るかどうか」という、「継続」か「終了」かの2者択一型の意思決定過程に注目している。そして、遊びを継続するかやめるかは、ある程度個人の自由意志によることや(「やめるね」の一言で、遊びを抜けることができる)、共同で意思決定をする内容にもバリエーションがあることを明らかにしている。そして、Harris(2000)は、ごっこ遊びやふり遊びが始まると、その遊びから新しく生起したり、他の事物から持ち込まれたりしたイメージも、子どもの間で共有されると述べている。同様に Sawyer(1997)は、即興的に子どもが遊びを構築していくことについて言及している。これらの研究は、子どもが遊び過程で行う会話によって、相手の意図を読み取ったり自分の意図を伝えていることを明らかにしていると言えるだろう。そして、会話によるお互いの意図の調整が、どのように遊びを展開していくかを決めるに重要な役割を果たしていることを示しているとも言える。但し、大人に比べて意図などを言葉で示したり、相手の言葉の内容を理解することが難しい子どもの遊びを、言葉にのみ焦点を当てて分析するのには限界があるのではないだろうか。子どもは言葉以外にも、様々な情報を他児や環境から得ていると考えられる。

そのような問題から、身体の動きからやりとりを分析する方法でも研究が行われている。ごっこ遊びにおいて子ども同士が如何にイメージを共有するかを、身体的観点から見たのが砂上である。砂上(2000)は、事例の分析によって、ごっこ遊びにおいて他者と同じ動きをすることが、個々のイメージだけでなく、ごっこ遊びの設定自体の共有に重なることを明らかにしている。更に砂上(2002)は、遊びにおいて場を共有することが、場の使い方を共有することを意味し、場の使い方は具体的な身体の動きとして共有されると述べている。増田・秋田(2001)は、4歳児のごっこ遊びにおける役割の成立過程を検討し、その結果、全体的には言

葉による成立が多いものの、暗黙的な働きかけも使われることがあると述べている。砂遊びにおける子ども同士のやりとりの特徴を検討した箕輪(2006)も、砂遊びにおいて、幼児が同じ対象に関わること(=同じものを作ること)が類似した動きを生み、イメージの共有が維持されると指摘している。また、箕輪は、他児が砂に関わる身体の動きから、他児の意図やイメージを読み取ることで、自分が如何に振る舞えばよいのかを子どもが判断していると述べている。そして、森(1999)は、幼児の遊び行動における身体の動きは、社会的な相互作用を通して得られる他者との行為可能性の環境と接觸している存在であり、自己を表していると述べている。砂上、箕輪、森の指摘からは、子どもたちは言葉だけではなく身体の動きによっても、相手の意図やイメージを読み取ったり、自分の意図やイメージを相手に伝えていたりしていると言える。これらの研究は、言葉だけでなく、子どもたちが身体の動きによって他児に意図を伝えたり、他児から情報を受け取っていることを示している。子ども同士の会話だけでなく身体の動きや環境などから、そしてそれらを総合した上で、子ども同士のやりとりの内容や遊びの展開を読み取る必要があると考えられる。

以上の研究は、共同遊びの成立や展開過程における幼児同士の相互作用を明らかにしようと試みた研究だと言える。しかし、共同遊びにおいて言葉や身体を用いることで、共同遊びが如何に展開していくかという「構造」や「遊びの転換点」などについては、まだ研究が少なく、明らかになっていることは少ない。竹井(1996)は、幼児の遊びが展開し発展していく経緯に、「遊びの不確定段階」「遊びの実行段階」「遊びの転化・発展段階」という特徴的なプロセスがあると述べている。竹井が指摘した結果は、その根拠となるデータや分析方法が明確となっていないものの、共同遊びの開始から終了までの展開過程を捉える試みは、これまでに殆どなされていないことから、竹井の研究は、共同遊び研究において今後検討する必要がある課題を示唆したと言えるだろう。竹井が遊びの開始から終了までの展開過程を捉えようとしたのに対し、佐藤・結城(1997, 1998a, 1998b, 2000, 2001)や結城(2004)は、3年間に渡る観察データから、発達によって共同遊びの展開過程と仲間関係が如何に変化するかについて検討を行っている。その結果、ある程度決まった仲間集団が、日々共同遊びにおいて相互作用を繰り返すことによって、集団の特徴や遊びの展開過程の特徴が形成されることを指摘している。しかし、結城や佐藤らの

研究は、一日における共同遊びの展開過程と、3年間における各集団の共同遊び過程の特徴の変化とが、明確な関係を持ったものとしては示されていない。竹井や、結城、佐藤らの研究は、今後の共同遊びの展開過程に関して、(1)ある日の一定時間に行われる、遊びの開始から終了までの展開過程の分析(2)共同遊びの展開過程が、発達によって如何に変化していくかの縦断的分析という2つの観点から研究を行った上で、更にそれぞれの研究における関連性を分析するという、共同遊び研究を行う上での新たな視点を提示するものとなっている。そして、河邊(2002)は、幼稚園の5歳児が行った「ドッジボール鬼ごっこ」を観察し、幼児同士でルールを作り出す過程を分析している。そして、ルールが発生する過程における子どもたちの動きに、「遊びの中で何かの混乱や停滞が生じること」→「(混乱や停滞の)状況をなんとかしたいという思いが高まること」→「(なんとかしたいという思いの高まりが)他の参加メンバーの中にも起きること」という条件があると述べている。つまり、この「ドッジボール鬼ごっこ」をする過程で起きた遊びの混乱や停滞の中には、新しいルールの生成と共有の可能性が含まれていたと言えよう。幼児同士の砂遊びの特徴を検討した箕輪(2006)は、子どもが手を加えることで変化した砂の状態から誘引された見立てから、新たなテーマが生成し共有される可能性があることを指摘した。Corsaro(1985)や氏家(1996)は、幼児の遊びは、きわめてきまぐれな性質を持ち、面白うことや目を引くことがあるとすぐに行動を変えてしまうと指摘している。箕輪が指摘した、砂遊びにおけるテーマ変化の可能性も、「砂の状態変化」という子どもにとって目を引く出来事の中に潜在していると考えられる。

これらの研究は、幼児の共同遊びにおいて、子どもたちが何をどのようにやりとりしているのかだけではなく、遊びの流れ全体を見通し、遊びの展開構造や展開のポイントを明らかにしようと試みている。但し、先に述べたように、まだこのような研究は少なく、遊びの中で用いる素材や、遊びの内容形態によって、遊びの展開構造や展開のポイントにどのような差異がでてくるのかは、今後の共同遊び研究の課題であると言えるだろう。更に、子どもが何についてどのようにやりとりすることで、遊びが展開していくのかということにも目を向けて行く必要があると考えられる。

4. 考察

本稿では、共同遊びに関する先行研究が、どのよ

うに「共同遊び」を捉えて来たのかについて、内容形態の観点と、遊びの展開過程という2つの観点から整理を行ってきた。本稿で整理したことを振り返りながら、今後の共同遊び研究において、どのような研究の観点が必要かについて考察する。

グループサイズや集団形態といった形態という観点で、幼児の共同遊びを捉えようとするとは、遊んでいる子どもたちが、どの程度の社会的な発達段階にあるのかを知ることに繋がる。しかし、そのように遊びを捉えることで、遊びの過程で起きていることを捨象してしまう。同様に、遊びの内容で共同遊びを捉えることについても、遊びに用いる素材によって、共同遊びの構造がどのように違うのかなどを知ることができる。しかし、実際には子どもたちの遊びは「○○遊び」とくくることが難しいくらい、複雑な要素が絡み合っている。更に、時間の経過と共に遊びも変化していくと考えると、「○○遊び」と遊びをくくって研究を行うことに限界が現れてくる。つまり、内容形態に焦点を当てて共同遊びを分析することで、遊びを全体的、かつ明確に捉えることは可能になる一方で、時間の経過に伴い、遊びが展開していく上で何が変わっていくのかを捉えることは難しい。遊びの展開過程に焦点を当てた研究についても、その多くがやりとりの内容ややりとりの媒介について分析したものであり、やりとりすることで何がどのように変化していくのかということまでは十分に明らかになっているとは言えない。

遊び全体を概観するというマクロな視点での研究は行われてきたと言えるだろう。しかし、遊び全体に流れている時間や、子どもが何と遊び、誰と遊ぶのかといったことは、これまでの共同遊び研究では殆ど行われてこなかった。しかし、今後はそういったミクロな視点から共同遊びの研究を出発していくことも必要なではないだろうか。

註

- 会沢義雄；横山文樹 1994 遊びの展開過程についての一考察：5歳児の遊びにおける物の役割 北海道教育大学紀要、第一部。C、教育科学編 44 229-237
- 秋田喜代美・増田時枝 2002 ごっこコーナーにおける「役」の生成・成立の発達過程。東京大学大学院教育学研究科紀要、41 349-364
- Bakeman, R., & Brownlee, J. R. 1980 The strategic use of parallel play: a sequential analysis. Child Development 51 873-878
- Baker-Sennett, J., Matusov, E. & Rogoff, B. 1992 Sociocultural processes of creative planning in children's playcrafting Context and

- cognition: ways of Bateson, G 1972 A theory of play and fantasy
Steps to an ecology of mind 177-193
- Berndt, T. J., & Perry, T. B. 1986 Children's perceptions of friendships as supportive relationships Developmental Psychology 22 640-648
- Bonica, L. 1993 Negotiations among children and pretend play Stambak, M., & Sinclair, H. ed Pretend play among 3-year-olds 55-78
- Brownell, C. A 1990 Peer social skills in toddlers: Competencies and constraints illustrated by same-age and mixed age interaction Child Development 61 838-848
- Corsaro, W. 1997 The Sociology of Childhood Thousand Oaks, Pine Forge press
- Corsaro, W. A 1986 Discourse process within peer culture: From a constructivist to an interpretive approach to childhood socialization Sociological studies of child development 1 81-101
- Corsaro, W. A 1992 Interpretive reproduction in children's peer cultures childhood 1 64-74
- Corsaro, W. A. 1994 Discussion, debate and friendship process: Peer discourse in U. S. and Italian nursery schools. Sociology of Education 67 1-26
- Corsaro, W. A. 1985 Friendship and peer culture in the early years Norwood, NJ: Abex
- Corsaro, W. A. 1983 Script recognition, articulation and expansion in children's role play Discourse processes 6 1-19
- Dodge, K. A 1983 Social and Children's Sociometric Status: the role of Peer Group Entry Strategies Merrill-Palmer quarterly 29 309-336
- Doyle, A. B & Connolly, J., 1989 Early Childhood Research Quarterly 4 289-302
- Dunn, L., & Herwig, J. 1992 Play behaviors and convergent and divergent thinking skills of young children attending full-day preschool Child Study Journal 22(1)23-38
- Ellis, S., Rogoff, B., & Rivest, L. 1980 Age segregation in children's social interactions Developmental Psychology 17 399-407
- Fine, G. 1981 Pretend play in childhood: an integrative review Child Development 52 1095-1118
- Forbes, D. L, Katz, M. M, Paul, B., & Lubin, D. 1982 Children's plans for joining play: An analysis of structure and function. In D. Forbes, & M. T. Greenberg (Eds.), new directions for child development: Children's planning strategies (pp.61-79) San Francisco: Jossey Bass 61-79
- Furman, W. & Robbins, P. 1985 What's the point? Issues in the selection of treatment objectives. B. H. Schneider, K. H. Rubin, & J. E., Ledingham (Eds.). Children's peer relations: Issue in assessment and interview (pp.41-54) New York: Springer-Verlag. 41-54
- Garvey, C 1984 Children's talk. Cambridge, MA: Harvard University Press
- Garvey, C 1977 Play. Harvard University Press.
- Garvey, C., & Kramer, T. L 1989 The language of social pretend play. Developmental Review 9 364-382
- Goncu, A. 1993 Development of intersubjectivity in social pretend play Human Development 36 185-198
- Goncu, A., & Kessel, F. S 1988 Preschoolers's collaborative construction in planning and maintaining imaginative play International Journal of Behavioral Development 11 327-344
- Green, E. H. 1993 Group play and quarrels among preschool children Child Development 4 302-307
- 浜谷直人；常田秀子；藤崎春代；鈴木さゆり；木原久美子 1993 幼児の共同遊び場面における会話：会話の管理（conversational management）の視点から：(1)分析の枠組み 日本教育心理学会 総会発表論文集 35 490
- Hartle, L. C. 1996 Effects of additional materials on preschool children's outdoor play behaviors Journal of Research in Childhood Education 11(1)68-81
- Hartup, W. W. 1983 Peer relations. Handbook of child psychology 4 145-149
- 畠山美穂；畠山寛；山崎晃 2003 仲間とうまく関われない幼児はどのように社会的スキルを学習するか？—日常の保育場面での遊びや保育者との関わりを通して 保育学研究 41(1)20-28
- 廣瀬聰弥；志澤康弘；日野林俊彦 他 2006 幼稚園の屋内と屋外の遊び場面における幼児の仲間関係 心理学研究 77(1)40-47
- Holloway, S., & Reichart-Erickson, M. 1988 The relationship of daycare quality of children's free play behavior and social problem solving skills Early Childhood Research Quarterly 3 38-53
- Howes, C., & Matheson, C 1992 Sequences in the development of competent play with peers: Social and social pretend play Developmental Psychology 28(5)961-974
- Howes, C., & Rubenstein, J. L. 1981 Toddler peer behavior in two types of day care. Infant Behavior and Development 4 387-393
- 藤井啓之 1994 乳幼児における遊びの発達に関する研究 広島大学教育学部紀要. 43 87-96
- 藤崎春代；無藤隆 1985 幼児の共同遊びの構造：積み木遊びの場合 教育心理学研究 33(1) 33-42
- 飯島典子 2003 幼児のごっこ遊びにおけるミス・コミュニケーション 東北大学大学院教育学研究科研究年報 51 171-185
- 池上貴美子；近藤アヤ 2004 幼児期の遊び場面における定型的やり取りの発達過程 金沢大学教育学部紀要. 教育科学編 53 191-206
- 岩田恵子 2004 子ども同士の相互交渉のはじまり：モノを介して仲間と出会う 日本女子大学紀要. 家政学部 51 9-14
- 岩田恵子 2002 幼児の遊び場面にみる意図の共有のプロセス 日本女子大学紀要 49 37-42
- Joe L. Frost and Sylvia Sunderlin, editors 1985 When children play: proceedings of the International Conference on Play and Play Environments Wheaton, MD: Association for Childhood Education International
- Kalliala, M 2002 Angelprincess and Suicide on the Playground Slide. The Culture of Play and Societal Change European Early Childhood Education Research Journal 10(1)7-28
- 仮屋園昭彦 1997 共同遊びを促進する教示が幼児の遊びの内容に

- 及ぼす効果 日本教育心理学会総会発表論文集 39 163
 仮屋園昭彦 1999 幼児の協同遊びを促す教示の効果 鹿児島大学
 教育学部研究紀要 教育科学編 261-266
- 鹿島達哉 1992 幼児の遊びにおけるテーマの共有について：遊び
 の枠組みと社会的共同調整行動との関係 広島大学教育学部紀
 要 第一部 心理学 40 149-154
- 柏まり 2004 幼児の仲間集団における遊びの創造過程—リーダー
 的な幼児を中心とした話し合いの場面を事例として 中村学園
 大学・中村学園大学短期大学部研究紀要 36 43-48
- 柏谷亘正 1999 幼児のモノを媒介とした集団遊びとコミュニケーションとの関係について：5歳児SSの自由遊び場面を通して 日本保育学会大会発表論文抄録 52 34-35
- 倉持清美 1994 就学前児の遊び集団への仲間入り課程 発達心理
 学研究 5(2) 137-144
- 倉持清美；柴坂寿子 1999 クラス集団における幼児間の認識と
 仲間入り行動 心理學研究 70(4) 301-309
- 倉持清美；柴坂寿子 2003 仲間遊びに対するある園児のイメー
 ジの変容 乳幼児教育学研究 12 1-9
- 増田時枝・秋田喜代美 2002 遊び開始時の「役」発生・成立スタイルの検討—4歳児のごっこ遊びをとおして— 保育学研究 40
 (1) 75-82
- 松井愛奈 2001 仲間との相互作用のきっかけにおける転換と一貫
 性—子ども2人の3年間の縦断事例とともに— 保育学研究
 39(2) 59-69
- 松井愛奈 2001 幼児の仲間への働きかけと遊び場面との関連 教
 育心理学研究 49 285-294
- 松井愛奈；無藤隆；門山睦 2001 幼児の仲間との相互作用のきっ
 かけ：幼稚園における自由遊び場面の検討 発達心理学研究
 12(3)195-205
- 松本信吾 1993 子どもは何故砂遊びに魅きつけられるのか 発達
 53 48-64
- Mayer, S. & Musatti, T 1993 Pretend play in schoolyard: Propagation
 of play themes among a group of young children Stambak, M.,
 & Sinclair, H. ed Pretend play among 3-year-olds 31-54
- Michael Lewis and Leonard A. Rosenblum ed. 1975 Friendship and
 peer relations
- 三宅茂夫 2002 幼稚園における持続的遊び集団の相互作用過程：
 ベールズの相互作用過程分析をとおして 教育実践学論集
 3 15-28
- 無藤隆 1996 身体知の獲得としての保育 保育学研究 34 144-
 151
- 無藤隆 1996 幼児同士の遊びの成立過程—砂場遊びの分析— 子
 ども社会研究 2 3-17
- 無藤隆 1990 共同するからだとことば—幼児の相互交渉の質的分
 析— 金子書房
- Packer, M. 1994 Cultural work on the kindergarten playground:
 Articulating the ground of play Human Development 37 259-276
- Packer, M., & Asher, S. R 1993 Friendship and friendship quality in
 middle childhood: Links with peer group acceptance and feelings
 of loneliness and social dissatisfaction. Developmental Psychology
 29 611-621

- Pellegrini, A. D. 1992 The social-cognitive ecology of preschool class-
 rooms: Contextual relations re-visited International Journal of
 Behavioral Development 7 321-332
- Petrakos, H., & Howe, N. 1996 The influence of the physical design
 of the dramatic play center on children's play Early Childhood
 Research Quarterly 11 63-78
- Puttlaz, M., & Gottman, J. M 1981 An interactional model of child
 ren's entry into peer groups Child Development 52 986-994
- Rayna, S., Ballion, M., Breaute, M., & Stambac, M. 1993
 Psychosocial knowledge as reflected in puppet shows improvised
 by pairs of children Stambak, M., & Sinclair, H. ed Pretend play
 among 3-year-olds 79-114
- Rizzo, T., Corsaro, W. A., 1988 Toward a better understanding of
 Vygotsky's process of internalization: It's role in the development
 of concept of friendship. Developmental Review 8 219-237
- Rizzo, T., Corsaro, W. A., & Bares, W. 1992 Ethnographic methods
 and interpretive analysis: Expanding the methodological options of
 psychologists Developmental Review 12 101-123
- Robinson, C. C., Anderson, G. T., Porter, C. L. Hart, C. H., &
 Wouden-Miller, M 2003 Sequentia; transition patterns
 of preschoolers' social interactions during child-initiated play: is
 parallel-aware play a bidirectional bridge to other play states
 Early Childhood Research Quarterly 18 3-21
- Rubin, K. H. 1977 the social and cognitive value of preschool toys
 and activities Canadian journal of behavioural science 9 382-385
- Rubin, K. H., Maioni, t. L., & Horning, M. 1976 Free play behavior
 in middle-and lower-class preschoolers: Parten and piaget revisited
 Child Development 47 414-419
- Rubin, K., Bukowski, W., & Parker, J 1998 Peer interactions,
 relationships, and groups. Handbook of child psychology 3 619-
 700
- 佐藤公治；結城孝治 2001 幼児の共同遊びにおける相互行為と役
 割カテゴリーの獲得：“vocabularies of motives(動機の語彙)”
 の観点から 日本教育心理学会総会発表論文集 43 232
- 佐藤公治；結城孝治 1997 幼児の共同遊びの生成過程と社会的相
 互作用(1)：相互作用の微視的過程と集団構造 日本教育心理
 学会総会発表論文集 39 164
- 佐藤公治；結城孝治 1997 幼児の共同遊びの生成過程と社会的相
 互作用(2)：相互作用の微視的過程と集団構造 日本教育心理
 学会総会発表論文集 39 165
- 佐藤公治；結城孝治 1998 幼児の共同遊びの生成過程と社会的相
 互作用(3)：相互作用の微視的過程と集団構造 日本教育心理
 学会総会発表論文集 40 97
- 佐藤公治；結城孝治 1998 幼児の共同遊びの生成過程と社会的相
 互作用(4)：相互作用の微視的過程と集団構造 日本教育心理
 学会総会発表論文集 40 98
- 佐藤公治；結城孝治 2000 幼児の共同遊びの生成過程と社会的相
 互作用(5)：相互行為における声、その社会・文化的な分析 日本
 教育心理学会総会発表論文集 42 669
- 謝文慧 1995 幼児の遊びにおける交渉ストラテジー—勢力関係と遊
 びの維持との関連 幼年教育研究年報 17 91-98

- Shim, S Herwig, J, E. Shelley, M 2001 Preschoolers's Play Behaviors With Peers in Classroom and Playground Settings Journal of Research in Childhood Education 15(2)149–163
- Sluss, D, J. Stremmel, A, J. 2004 A Sociocultural Investigation of the Effects of Peer Interaction on Play Journal of Research in Childhood Education 18(4)293–305
- Smilansky, S.(1968). The effects of sociodramatic play on disadvantaged preschool children. New York: John Wiley.
- Smith(P. K, & Connolly, K. J. The ecology of preschool behaviour New York: Cambridge Unibercity Press
- Stambak, M., & Sinclair, H. ed 1993 Pretend play among 3-year-olds Lawrence Erlbaum Associates, Inc., Publishers
- Steven R. Asher and John M. Gottman The Development of children's friendships
- 菅野幸宏 1998 2名集団によるふり遊び過程の分析(2) 弘前大学教育学部教科教育研究紀要
- 菅野幸宏 1999 2名集団によるふり遊び過程の分析(3) 弘前大学教育学部教科教育研究紀要 29 17-32
- 菅野幸宏 2000 2名集団によるふり遊び過程の分析(4) 弘前大学教育学部研究紀要 2 27-40
- 菅野幸宏 2002 2名集団によるふり遊び過程の分析(5) 弘前大学教育学部紀要 87 197-207
- 菅野幸宏 2003 集団ふり遊びの創造的即興的側面について 弘前大学教育学部紀要 89 147-157
- 砂上史子 2000 “ごっこ遊びにおける身体とイメージ— イメージの共有として他者と同じ動きをすること—” 保育学研究 38 177-184
- 砂上史子 1999 子どもの仲間関係と身体性—仲間意識の共有としての他者と同じ動きをすること— 乳幼児教育学研究 8 75-84
- 砂上史子； 無藤隆 2002 幼児の遊びにおける場の共有と身体の動き 保育学研究 40(1) 64~74
- 高橋たまき, 中沢和子, 森上史朗 共編 1996 遊びの発達学：展開編 培風館
- 高橋たまき 1984 乳幼児の遊び その発達プロセス 新曜社
- 高橋たまき 1989 想像と現実—子供のふり遊びの世界— プレーン出版
- 高橋たまき, 大和田保枝, 福山清蔵, 藤崎真知代, 1976 集団自由遊び場面における幼児の行動分析—対人行動について— 日本女子大学児童研究所紀要 3 18-38
- 田中亨胤；爾寛明；佐藤哲也 1999 幼児期における人間関係の質的発達とカテゴリー：幼稚園の遊び時間における観察事例をもとにして 兵庫教育大学研究紀要. 第1分冊, 学校教育・幼児教育・障害児教育 19 131-138
- 田中亨胤；爾寛明；佐藤哲也 2000 幼児期の集合遊びにおけるテーマリーダーの役割 兵庫教育大学研究紀要. 第1分冊, 学校教育・幼児教育・障害児教育 20 107-113
- 田中亨胤；柏まり 幼児期にふさわしい生活の展開に関する—考察—遊びを創る過程における話し合い活動を事例として 教育学研究紀要 中国四国教育学会 48(1) 583-594
- 田中浩司 2005 幼児の鬼ごっこ場面における仲間意識の発達 発達心理学研究 16(2)185-192
- 富田昌平 2001 幼児の共同ふり遊び場面におけるメタコミュニケーション 幼年教育研究年報 23 35-42
- 礪波朋子, 三好史, 麻生武 2002 幼児同士の共同意思決定場面における対話の構造 発達心理学研究 13 158-167
- 常田秀子；浜谷直人；藤崎春代；鈴木さゆり；木原久美子 1993 幼児の共同遊び場面における会話：会話の管理(conversational management)の視点から：(2)発達的検討 日本教育心理学会総会発表論文集 35 491
- 角田巖 1976 園庭みおける活動的な集団遊びの発生と経過について 日本保育学会大会発表論文抄録 29 36
- 上山真知子；佐藤周子 1981 大人と子どもの共同遊びの発達：積木遊び場面での観察と分析 心理科学 5(1)1~8
- 氏家達夫 1982 4-6歳児の社会的相互交渉についての研究 北海道大学教育学部紀要 40
- 山本弥栄子 2002 幼児間の会話の発達過程—遊びの分類・会話の集団的形態・伝達特徴による検討 1 35~51
- 横井一之 1996 幼児の砂遊びについて：オーストラリアの幼稚園を参観して 愛知教育大学幼児教育研究 5 25-31
- 横山洋子 園庭という空間の性質と子どもへの影響—新しい丸太小屋と砂場での子どもの体験から— 68-69
- 吉村齊 1996 幼児期の遊び仲間形成における道徳的判断と対人行動の特性 高知学園短期大学紀要 26 1-9
- 結城孝治 2004 保育園年長児の協同遊びにおける相互作用と仲間関係の再帰的構築過程：年長児はどのように協力的に遊んでいるのか？ 国学院短期大学紀要 21 79-97
- 結城孝治 2002 遊びの「協同性」と身体的行為 日本保育学会大会発表論文抄録 55 762-763